

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月18日現在

機関番号： 14601

研究種目： 基盤研究C

研究期間： 2009 ~ 2011

課題番号： 21530689

研究課題名（和文）

幼児の嘘－「心の理論」の指標としての発達の意味とその発現の規定要因の検討－

研究課題名（英文）

Young Children's Deception and Lying as indices of the Acquisition of Theory of Mind

研究代表者

瓜生 淑子 (URYU YOSHIKO)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号： 20259469

研究成果の概要（和文）：

幼児に対して、ヒーローを救うために悪者にウソをつけるかという欺き課題と「心の理論」の獲得を見る標準的な誤信念課題を実施し、あわせて行った母親のアンケート調査の結果を含めて、子どものウソの出現時期の確認とウソを可能にする認知的・人格的要因を検討し、子どもの心的世界の形成にとっての子どものウソの持つ意味を考察した。研究は、1) 幼稚園児の個別実験と2) 母親に子どものウソに気づいているかを問うアンケート調査からなった。その結果、個別実験からも親の調査からも、効果を意図したウソの年齢下限は、満4歳頃であることが確認された。しかし、非第一子の性格であると見られたパーソナリティの「のびやかさ」尺度得点が実験場面でのウソの出現を早めるという仮説は検証されず、むしろ「慎重さ」尺度と逆転させて名付け、この尺度得点が正の影響力を持つとして仮説とは逆に解した方が適合する結果が示された。この尺度が認知的能力の代替変数になった可能性がある。また、前研究に比べ、ウソが可能になる年齢や「心の理論」獲得の年齢がやや遅かったことについては、対象児の保育経験（幼稚園児か保育所児か）の違いが自他の分化に影響している可能性が示唆された。この点については、今後、年長児のデータも加えて分析し、検討したい。

研究成果の概要（英文）： In this study the lower limit of the age of the acquisition of Theory-of-Mind was examined, by introducing a deception task with very familiar characters for young Japanese children, which was designed not to arouse their fear or hesitation. The results showed that even in this familiar situation, it was difficult for children under 4-year-old to deceive intentionally, which confirmed the former findings. Personality effect on the deception task was examined through logistic regression analysis, which showed not "independent" effect but "prudent" effect on the performance. These findings are discussed with regard to children's very early experience at home or away from home.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 教育心理学、生涯発達

キーワード： 幼児の認知発達・自我発達

1. 研究開始当初の背景

ここ20年以上、世界的に「心の理論」研究が行われた。「心の理論」の獲得とは、他者の認識内容は事実とは必ずしも一致していない、即ち、人は「誤信念」を抱きうること、また人はその誤信念に依拠した行動を取ることがわかるようになることである。「心の理論」獲得の有無は、標準化された誤信念課題等によって簡単に判断しうるもので、多くの研究が国内外でなされてきた。その結果、「心の理論」の獲得は4歳頃と言われるようになった。しかし、もっと早い時期から「心の理論」の獲得が確認できるのではないかという期待から、子どものウソが注目され始めた。

他人にウソをつく行為の出現は、幼児期に始まる内的世界の形成にとって重要なメルクマールである。「ウソをつくな」という大人の教えに背く行為は、幼児期の自我形成にとって重要なエポックでもある。しかし、こういう視点から子どものウソを取り上げた研究は日本では長らく行われてこなかった。

子どものウソを含む騙し (deception) の年齢下限ということに限って見れば、複数の研究が行われてきたが、2歳の子どもでも騙し行為が可能であるという研究と、それは4歳以降であるという研究があり、決着はついていない。また、実験者に唆されて大人を陥れることや、覗き見の葛藤状況に子どもを追い込むなどの設定には、倫理的な問題も指摘された。

研究代表者は、「心の理論」との関係づけを念頭に置きつつ、子どものウソにせまる課題を工夫した (瓜生、2007)。子どもは、正義の味方であるアンパマンに届ける大事な物が入っている箱(白)を守るために、反対側からっぽの箱(灰)をバクマンに教える、つまり、ウソをついてバクマンに誤信念を提供する。この課題は標準的な誤信念課題とよく似た二者択一の課題構造でありながら、子どもにとって、より自然で親密な課題となった。

この課題に依った結果、4歳後半以降は正答 (=バクマンにウソをつく) 率が高くなり、標準的な課題によった場合よりも早い時期から、自他の認識の違いがわかっている、即ち、「心の理論」が獲得されていることが確認できた。他方、4歳前後の時期は、アンパマン課題によっても、「心の理論」の獲得が確認できないこともわかった。性差も明らかになった (男児の方が正答率が高い、即ち、ウソをつく)。さらに、出生順位についても非第一子児の場合に正答率が高くなる傾向が多変量解析 (ロジスティック回帰分析) によって示唆された。出生順位が「心の理論」獲得に影響を及ぼす可能性の指摘は既にあつたが、

実証データは十分ではなかった。

2. 研究の目的

瓜生 (2007) の研究は、内外の子どものウソの本格的研究の緒となり、また、パーソナリティ要因を示唆するなど、「心の理論」研究に新たな展開を示した。しかし、実験条件にさらに工夫を加え、年少児のウソの出現率の低さを再確認することが課題となった。これをふまえ、今回の研究では以下を検討する。

1) 「心の理論」の獲得の時期の下限 - 3歳後半から4歳半ば - についての実証的研究:

瓜生 (2007) の研究に関して、年少児に恐怖等による反応抑制が生じ、結果としてウソが出現しにくかったという解釈の余地を排するため、実験条件の工夫を行い、「心の理論」獲得の年齢下限の論争に決着を付ける。その際、恐怖感の指標として HR や脈波も採用する。

2) パーソナリティ要因の検討:

前研究で示唆されたデモグラフィックな要因について、親への質問紙調査によって子どものパーソナリティ特徴として具体的に捉えた上で、そうした特徴が、より早いウソの発現傾向と関連していることを確認する。

これらにより、幼児の自我形成・自立というテーマに、子どものウソという行為を指標として組み込むことになり、幼児期中期以降の「ウソ」という行為が、子どもの心的世界の形成にとって持つ認知的な側面 («心の理論」がとらえているもの) に加え、人格的な側面での発達の意味が明確になる。その結果は、保育現場において、大人から見て好ましくないウソなどの行為を頭ごなしに否定するのではなく、子どもたちの世界を見守っていくことの必要性も示唆することになるだろう。

3. 研究の方法

【研究1】大学附属幼稚園の3歳児~5歳児の保護者に対してアンケート調査を実施。子どものウソにこれまでに気づいたことがあるかどうかに関して、「叱られることを意識して」「きょうだいや友だちをかばうために」「遊びやゲームで」など日常場面ごとに、また、叱られそうな場面なのか、自発的に言い来たのかなどに分けて、「よくあり」「あり」「なし」「わからない」を選択肢として尋ねた。また、「ウソ」「ヒミツ」などの単語の使用、及び「作り話」「隠し事」の出現等についても同様に尋ねた。担任を通じて保護者に調査用紙を配布し、回収箱に回収した。有効回答数 130 (回収率 87.4%)。調査期間は 2010

年10月5日から1週間。

【研究2】研究1で回答のあった保護者の子どもについて、3歳児・4歳児のみ個別実験を行い、3歳児42名(M=47.2ヶ月;女兒は19名)、4歳児年中児50名(M=60.0ヶ月;女兒は25名)、計92名の参加を得た。課題は、瓜生(2007)の紙芝居風にパソコンに呈示された課題(アンパンマン課題)を使用。アンパンマンを助けるためにバキマンにウソをつけるかを二者択一で問うた。前研究と異なった点は、ウソを答える心理的負担に配慮して、第一試行誤答者に対しては、第二試行では子どもが実験者に回答をこっそり伝えるだけにさせ、実験者が悪役と対決し、答える役を代替した点である。誤信念課題(位置移動課題)も実施した。2010年9月~12月に、園の別室で自由保育時間帯に個別実施。全所要時間は1人15~20分。

4. 研究成果

【研究1】子どもの月齢を3歳後半から半年区切りで6群に分けた(順に9、12、31、25、27、26名)。検定の際は、「よくあり」「あり」を合併して「有」とし、当該行為の有無(0,1)を3年齢群間或いは6年齢群間で比較した。

①「問い詰められての言い訳としてのウソ」の出現は、3歳後半ではやや低いものの、年齢差がさほど顕著ではなかった。「自分から言いに来るウソ」は4歳以上になって出現するようであった(図1)。

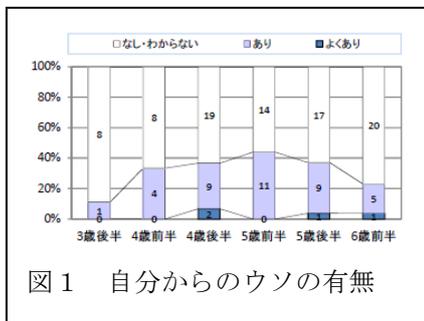


図1 自分からのウソの有無

②「ヒミツ」「ナイショ」等や「ウソ」「ホントウ」等、ウソに関連する単語の使用については、3歳後半では出現率が低く、5歳後半以降高くなる傾向が見られた(図2)。

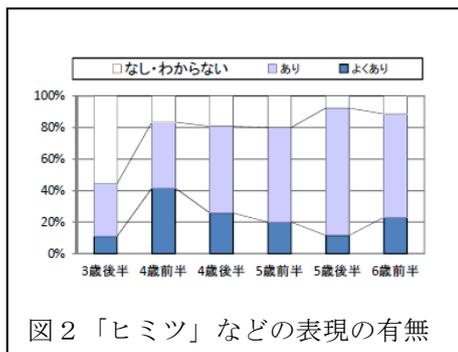


図2 「ヒミツ」などの表現の有無

③「とがめられないようにする隠し事」の有無では、3歳後半では皆無で、6歳前半児では高くなった(図3、 $p<.05$)

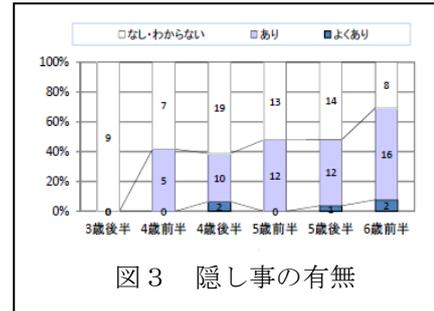


図3 隠し事の有無

④エピソード分析からみたウソの内容では、歯磨きなど生活習慣行為のサボタージュや粗相に関するウソが4歳児までに多かった。約束破りへの弁解、誰かを庇う、お世辞や気遣いからのウソは4歳児以降に多かった。負け惜しみからのウソ(例「初めからわかった」)は意外に早く、どの年齢でも聞かれた。

以上、母親アンケートからは、意図的なウソの言いつけ行為や隠し事など、ウソ等の効果を予測した行動は4歳以降に見られるが、4歳未満児では自分から言いに来るウソやこっそりとする隠し事など、いずれもまだ殆ど見られないことがわかった。これらからは、意図的なウソの出現の下限年齢は、4歳頃と見られた。

【研究2】3歳児・4歳児について、個別に前研究(瓜生、2007)のアンパンマン課題を実施し、バキマンに対してウソをつく行為の出現を見た。アンパンマン課題と標準的な誤信念課題の通過率は、前研究に比べてやや低いものの、3歳児ではまだ誤反応、つまりウソをつかない反応が主反応であること、この年齢では誤信念課題の方がむしろ正答率が高い点は前研究と同様であった(図4)。

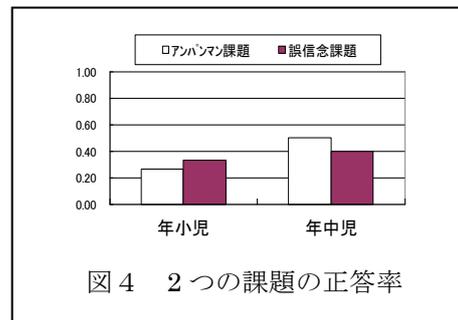


図4 2つの課題の正答率

アンパンマン課題の正誤についてロジスティック解析を行うにあたり、前研究で可能性が示唆された出生順位の影響を想定して親に尋ねた性格項目について因子分析を行い、「自己主張の強さ」「のびやかさ」の2つの因子

を抽出し、各因子の合成得点をパーソナリティ変数として「出生順位」の代わりに投入することとした。その結果、「年齢(2)」「誤信念課題(0,1)」「隠し事行為(0,1)」「のびやかさ(1~5)」の変数が説明変数として残った。「年齢」のみ第一段階で強制投入。あとは変数減少法(最尤法)によった。反応の正分類率は73.6%であり、適合度等の指標もよかった(HosmerとLemeshowの適合度検定は $\chi^2(8)=6.27, p<.62$ など)。ただし「のびやかさ」得点の係数は予測とは逆に負の符合だったので、むしろ「慎重さ」得点の正の影響と解釈される結果だった。

以上より、3歳児、とくに4歳未満の年齢の子どもではウソの行使が難しいことが実験的にも再確認された。また認識面での「心の理論」の獲得と、行動面での「隠し事」という経験とが、アンパマン課題でのウソの行使の説明変数として示された。本研究では発達年齢を説明変数に用意できなかったが、投入されたパーソナリティの「慎重さ」が、むしろ課題構造の理解(アンパマンにウソをつけばアンパマンを助けられる)において認知能力を媒介する変数となり、アンパマン課題の正答に効果的に働いた可能性が指摘された。

本研究の結果、以下のことがわかった。

1) 幼児の個別実験及び親へのアンケート調査から、満年齢4歳以前に、意図的なウソはまだ難しいという瓜生(2007)の結果が再確認された。

なお、今回は主に保育園児のデータによっていたが、今回は幼稚園のデータであった。アンパマン課題も誤信念課題も前研究よりやや正答率が低かったことには、対象児のこの違いが影響した可能性がある。瓜生(2009)では、幼保の生育歴の違いによって自然物への興味・関心に違いがあり、保育所生活での大人の目の及ばない子どもどうしの生活の中で培われるものの大切さが示唆されている。このことを上記の結果にあてはめると、保育所児の方が幼児期中期以降、子どもどうしの時間が長く、子どもどうしの駆け引きの経験の中で自他分化も自ずと促進される可能性が指摘できる。「心の理論」の獲得が欧米の子どもに比べて日本の子どもでは遅いことはよく知られてきているが、自我形成期の子どもと大人をめぐる関係の影響が「心の理論」獲得やウソの出現にも影響しているのかもしれない。生育環境の影響については、今後の多方面からのアプローチによって確かめられる必要がある。

2) 瓜生(2007)で示唆されていた性差や出生順位の影響は今回確認できなかった。出生順位の影響を想定したパーソナリティ要因の影響は、むしろ仮説とは逆で、第一子的要

因に対応する「慎重さ」得点がアンパマン課題での正答に寄与するという結果となった。今回は子どもの発達年齢を説明変数に組み入れることができなかったのだが、「慎重さ」得点が発達年齢とよく似た影響を示したのかもしれない。アンパマン課題の年中児の正答率が予想と異なり十分でないので、今後、年長児を含め、より広い年齢幅で諸要因の影響をさらに検討したい。

なお、3歳児が恐怖のため、ウソをつくことにためらう可能性をチェックするため、脈波等生理的指標も使う予定であったが、個別実験の所要時間の増大などから現場の負担が過度になること、また、子どもの体動によるアーティファクトの除去が難しいこともあり、この指標のモニターは研究の途中で割愛した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計4件)

① 瓜生淑子、自然物への興味・関心と幼少期の体験、日本保育学会第62回大会発表論文集、2009、p101

② 瓜生淑子、今日の乳幼児の発達と育児(3)、日本保育学会第63回大会、2010、p482

③ 瓜生淑子、幼児期のウソ—幼稚園児保護者アンケート調査から—、日本教育心理学会第53回総会、2011、p58

④ 瓜生淑子、子どものウソ—保護者調査との関連から—、日本発達心理学会第23回大会、2012、p390

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計 件) なし

○取得状況(計◇件) なし

[その他] なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瓜生 淑子 (URYU YOSHIKO)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20259469

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし